兵庫教育大学　研究紀要　第59巻　2021年９月　pp. 89－100

国語科におけるデス・エデュケーション教材としての闘病記の価値
―正岡子規の闘病記から―

The Value of the Journal of Struggle with Disease as a Teaching Material for Death Education in Japanese Language Arts: Focusing on Shiki Masaoka's Works

池　田　匡　史*
IKEDA Masafumi

死を見つめることを通して，生きることを考えるというプロセスを重視した取り組みであるデス・エデュケーションは，日本に合った展開，また教科の学習としての可能性を探ることが求められてきたといえる。本稿では，国語科での展開を想定する際,「闘病記」というジャンルのもつ教材として可能性を検討するものである。具体的には，デス・エデュケーションで議論されている目標を踏まえ，正岡子規による闘病記から窺える，死に向かう心理プロセス，また医療，看護への要求の具体を検討した。

結果，特に，死へ向かう心理プロセスに関して，デス・エデュケーションに関する議論で想定されている段階とは異なる姿を子規は示していた。死へ向かうプロセスの各段階に位置していたり，そこから外れていたりする闘病記を集めて編成し，単元とすることで,「死へのプロセスの理解」というデス・エデュケーション上の目標を達成する国語科学習を設定できると考えられる。

キーワード：生と死の教育，闘病記，正岡子規，国語科，単元設計
Key words：death education, the journal of struggle with disease, Masaoka Shiki, Japanese language arts, unit design

１．研究の目的・方法

「生と死の教育」,「死への準備教育」などと訳されるデス・エデュケーションの取り組みは，アルフォンス・デーケンによって我が国にその概念が示されて以降，学校教育においても様々な論が提示され，実践の展開もなされてきた（得丸ら，1999；小池，2010；赤澤，2004；赤澤，2005；大曲・長井，2008；初田，2017）。デーケン（1986）は，以下のようにデス・エデュケーションの目的を述べている。

> 人間は「死への存在」であり，この世に生を享けた瞬間からつねに死に向けて歩み続けている。したがって私たちは人生において，いつかは身近な人々の死と自分自身の死に直面せざるをえない。死そのものを前もって個人的に体験することはできないが，死を身近な問題として考え，生と死の意義を探求し，自覚をもって自己と他者の死に備えての心構えを習得することはできるし，また必要でもある。これが死への準備教育（デス・エデュケーション）の主な目的である。また，人生全体の意義は究極的には死をもって決定づけられ，完成されるものであるから，死への準備教育は同時によりよく生きるための教育でもある。（p.2）

つまりデーケンが説いたデス・エデュケーションは,「死」を積極的に考えることを通して，よりよい「生」をつくり上げていくことを目指すというプロセスに特徴がある。実際の学校での取り組みにおいては，特別にそのための授業を行うという形でもなされてきたが，それに対しては岩田文昭（2009）が次のような懸念点も示してきた。

> いのちの教育を熱心に進めている小中学校の教師には，高い問題意識をもち，非常に熱心であるあまり，児童・生徒にいささか強引な仕方で教育をなしている場合がある。（中略＝稿者）また，授業内容に好意的でない保護者もありえる。それゆえ，いのちの教育の内容は児童・生徒，さらにその保護者に抵抗なく受け入れられるように吟味されなければならない。（p.167）

このような懸念点を念頭に，岩田は外部講師を招くなどの「特別な授業」ではなく,「教科を通しての教育を中心におく」（p.167）なかで展開されることを提唱している。この視点から考えると国語科教育においても，人間固有の問題領域である「死」という問題に向き合ってき

＊兵庫教育大学大学院教育実践高度化専攻言語系教科マネジメントコース 助教
令和３年４月12日受理

た人々が残してきた文章を手掛かりとしながら，自らの考えを形成していくという学習のあり方が想定される（池田，2014）。このような取り組みとして山本伸子（1998），阿武泉（1998），井上泰（2011），竹本正子（2011）などが国語科でも積み上げられてきた。また，デス・エデュケーションの立場を明示的にした国語科での取り組みに，若杉かおる（1998）がある。

> 「生と死の教育」いわゆる「デス・エデュケーション」をテーマとした学習については，主に小学校を研究の現場とした（中略＝稿者）総合的学習の構想が提示されている。もちろん高等学校の現場でも，この問題は，国語科のみならず，地歴科・公民化・家庭科・保健体育科・理科など，多くの教科内容と結びつく総合的学習のテーマとなりうると考える。（p.3）

つまり若杉はこの学習を，教科横断的，総合的な学習としても考えられるとしている。これは近年カリキュラム・マネジメントの議論などでも登場している視点であり，デス・エデュケーションが教科をつなぐ核となりうる問題領域であることを示唆するものである。

ただ，竹松志乃（2012）は日本のデス・エデュケーションの展開について，「米英で開発された教育方法やテキストなどからの受け売りばかりではなく，日本の風土・文化・気質にあった独自の発展，開発を，少しずつ模索する段階にも到達しつつあるように思われる。」（p.190）と述べている。このことは，日本の教育場面で死と向き合ってきた営みを，諸外国でも展開されているデス・エデュケーションの議論と切り結びながら，その可能性をさらに探る必要性を示唆するものである。

以上のことからは，たとえばデス・エデュケーションの教材として使用できる可能性を持つテクストを探ることなどが課題として想定できる。本稿ではこの観点から，「闘病記」と呼ばれるものに対象を設定する。

研究の手順としては，まずデス・エデュケーションの目標を確認するとともに，本稿で追究する問題を整理する。次に闘病記の定義と，デス・エデュケーションにおける闘病記の価値を整理する。さらに，具体的な闘病記作品を取り上げ，その価値の具体を示す。最後に，国語科の実践として展開するための可能性を示す。

２．デス・エデュケーションの目標と課題

まず，デス・エデュケーションとは何を目指す営みなのかを再確認する。デス・エデュケーションの目標としてデーケン（1986）は「死への準備教育の十五の目標」（p.6）を掲げている。以下は，稿者によってそれを整理したものである（pp.6-48）。

１．死へのプロセスの理解／２．自分自身の死への準備，死についてのより深い思索／ ３．悲嘆教育（グリーフ・エデュケーション）／４．極端な死への恐怖の緩和，心理的負担の排除／５．死にまつわるタブーの除去／６．自殺を考えている人の心理理解，自殺予防方法の理解／７．告知と，ターミナル期患者の知る権利の認識徹底／８．死と死へのプロセスをめぐる倫理的な問題の理解／９．医学と法律に関わる諸問題についての理解の深化／10．葬式の役割の理解の深化，自身の葬儀についての準備の助け／11．時間の貴重さの発見，価値観の見直しと再評価／12．死の芸術（アルス・モリエンディ）の習得，第三の人生を豊かなものに／13．個人的な死の哲学の探究／14．宗教における死のさまざまな解釈の探究／15．死後の生命の可能性への考察

このなかでデーケンは「１．死へのプロセスの理解」について，キューブラー・ロス（2001）の研究の成果である，患者が死に向かう心理のプロセスの五つの段階を援用し，さらに六つ目の段階を付け加えている。各段階の内実を整理したデーケン（2001）の記述を以下に引用する。

第１段階―否認（denial）

この段階での患者は，自分が死ななければならないという事実を否定し，誤診だと思い込もうとする。自分の殻に閉じこもってしまうこともある。これらは，突然死に直面させられた場合の一種の防衛機制と考えられる。

第２段階―怒り（anger）

「なぜ，いま私が死ななければならないのか」という問いかけが，怒りとともに発せられる。この怒りは，しばしば患者の身近にいる家族や医師，看護婦などに向けられる。これは，「私は生きている」というギリギリの自己主張であり，やり場のない不条理感の表現である。この段階では，理性的なコミュニケーションは困難だが，周囲の人は，患者を避けようとしたり，怒りをぶつけたりせず，忍耐深く対応する必要がある。

第３段階―取り引き（bargaining）

患者は身近にいる医療スタッフや家族，あるいは自分の運命をつかさどる神と期限つきの約束を取り交わすことで，間近に迫る死を，少しでも先に延ばしてもらおうと試みる。たとえば，娘の結婚式に出席したいので，それが無事に終わるまで，何とか生かしてください，その代わり，苦しい治療もがまんします，毎日かならず祈りを捧げます，などと，何かと引き替えの取り引きを，医師や神仏に願うこと

である。

この段階は短いが，患者が他者に対してもっとも開放的，協調的になる時期であり，理性的なコミュニケーションも可能となる。ケアに当たる人たちは，この機会に患者が自分の人生を振り返って，「人生の見直しと再評価」や「人生の総決算」（英＝ life review therapy，独＝ Lebensbilanz）を行えるように援助することが望ましい。

第４段階―抑鬱（depression）

まず病気のために失った対象について嘆く「反応抑鬱」が現れ，やがてすべてを失わなければならないという自覚から，次の受容の段階に備える「準備抑鬱」へと移行する。「反応抑鬱」に対しては，患者が自尊心を取り戻せるように励ますことも大切だが「準備抑鬱」の状態に入ると，悲しまないようにと励ますのはかえって逆効果となる。

この時期の患者には，黙ってそばに座って手を握り，悲しみをわかちあうケアが，患者の心の支えとなろう。

第５段階―受容（acceptance）

患者は，自分の避けがたい運命を平静に受け入れるようになり，周囲に対してしだいに無関心になる。患者がこの段階に入ると，かえって家族のほうが，迫り来る愛する人の死を受容できずに不安や混乱に陥ることがあるので，医療関係者は，患者の家族への援助にも留意する必要がある。

以上がキューブラー・ロス博士の「死へのプロセスの五段階」説である。私はこれにもう一つ，「期待と希望」の第６段階を付け加えたい。

第６段階―期待と希望（expectation and hope）

クリスチャンなど死後の永遠の生命を信じる人の場合には，「受容」の段階にとどまらず，天国で愛する人と再会することへの期待と，永遠の未来に対する明るい希望に満ちた態度をとることが多い。欧米で私は，こういう人たちに数多く出会っている。死後の生命への希望は，生と死の意義を解明するうえでも，重要な鍵と考えられる。周囲の人たちも末期患者の抱くさまざまなスピリチュアル・ニーズをよく理解して，共感を示しながら，共に歩んでほしいと考える。（デーケン，2001：9-12）

これらの段階についてデーケンは，人によっては第１段階のまま過ごし続けるとされているものの[1]，これらの段階を経て「人格の飛躍的成長」（デーケン，2001：10）がなされるという。ただ，ここでデーケンが示す第６段階は，キリスト教的思想が強く表れているものである。そのため，我が国の状況に鑑みれば，それをどのような姿として捉えればよいのか，疑問が残る。しかしながら，この「死へのプロセスの理解」はデス・エデュケーションの文脈では重要な位置が与えられている。たとえばアメリカでのデス・エデュケーションの体系的なカリキュラムの設定を目指した Gordon & Klass（1979）では，６，７年生段階で，「自身や他者の予期される死への感情や，死ぬときに持つであう感情がわかる」（p.177）という到達目標[2]を達成するために，「死というイベントに抗う心情について議論できるような芸術，ドラマ，文学と生徒を触れ合わせる」（p.177）ことが学習活動として提案されている。つまり，様々な作品からこれらの心理プロセスを読み取ることで，デス・エデュケーションとしての学習目標に到達するという学習の枠組みが示唆される。そのため，その心理プロセスを追究するための教材の探究は不可欠なものといえる。

そこで，以降では，具体的な心理プロセスが表れている闘病記を取り上げ，ここで示した第６段階の内実をはじめ，闘病記がもつデス・エデュケーションとしての価値を検討する。このプロセスを探究する営みは，実践する際に学習者が行う具体的な学習活動の方向性としても位置づけることのできるものである。

３．闘病記の定義とデス・エデュケーションにおける価値

そもそも「闘病記」の定義について門林道子（2001）は，「病気に罹患した患者の家族もまた病気が引き起こす一連の闘病プロセスの中に巻き込まれる。そのように考えると，患者本人だけでなく，家族などが患者の闘病のプロセスを書いた手記も闘病記である」（p.146）と述べる[3]。ここからは，闘病記が先に示した，「死へのプロセスの理解」に寄与しうることが示唆される。

また，門林による闘病記の定義に対して土出郁子（2008）は，「氏の定義に対して他の研究者等からの批判的検討は確認されていない」（p.13）としつつ，「古くは正岡子規『病牀六尺』等に見られるように，文学作品として存在した。（中略＝稿者）「闘病記」は，資料分類の一としては確立されず，一般には文学，手記，ルポルタージュ，絵画，書き手の職業等に分類されてきた。」（p.8）と述べている。また，闘病記が読者に与えるものとして門林道子（2004）は，以下のものを挙げている。

> 第一に，病気や死と対峙する究極の状態にあっても懸命に生きる人間の姿，そして「生きる意味」を見出そうとする人間の本質である．（中略＝稿者）個々の闘病記からは，病気であるがゆえに気づく日々の生活のありがたさ，生きている実感が伝わってくる．（中略＝稿者）第二に，自己のみならず他者の「生命の大切さ」の認識であり，「周囲への思いやり」を学ぶことができる．（中略＝稿者）第三に，医療のあり

方への著者からの提言である．（p.209）

つまり自己や他者の「生」に対する感謝の気持ちと，たとえば「病気をみるのではなく個人をみてほしい」という医療に対する想いや，尊厳死・QOL に関する提言等，死にまつわる重要な問いを受け取れるというものである[4]。また，図書館の蔵書に闘病文学を充実させることの意義を論じた藤尾均（2011）も，「文学作品の一節を素材にして医療問題の諸相を具体的に把握し（文学），当該問題の社会的背景を歴史的脈絡の中で捉える（史学）とともに，そこから現代にも通じる哲学・倫理学的課題を汲み取って批判的に吟味し（哲学），ひいては医療の将来を実践的に切り拓くこと」（p.258）をその価値として挙げている。

ここで確認したように，死に向かう心理プロセスへの理解と，医療や看護に対する考え方への理解という側面をもつことから門林道子（2005）は，闘病記が社会的意味としてデス・エデュケーションの教材という役割を持つとの認識を示した（p.98）のである。

４．正岡子規の闘病記から見る価値の具体

４．１．子規を取り上げる理由

では，これらの価値は，どのように具体的に闘病記に表されているのであろうか。本稿では具体的な闘病記として，明治を代表する文学者正岡子規によるものを取り上げる。俳人として名高い子規は，人生の多くの時間を結核という当時の不治の病との闘いに費やした。しかし，その闘病があったからこそ文学の道で名を挙げたのである[5]。また，子規の闘病文学を考察した黒沢勉（1998）は，「長い病床生活の，このような心境の変化は大局的にみれば，キューブラー・ロスがいうような死を告知された時の「怒り」から「受容」へと変化する心境に対応する面もあるように思われる」（p.245）と，先に取り上げたキューブラー・ロスによる「死へのプロセス」の段階の移行が読み取れると指摘している。さらに，子規の死生観の形成過程を論じた工藤真由美（1996）は，「子規が，他者（この場合は，読者を中心とする）から，興味深い対象として注目を集めていたことは事実であり，それは，子規の作品の素晴らしさと共に，彼の置かれた重病という，境遇故であったということである。」（p.125）と述べている。

また，国語科教育の文脈においても，子規の作品を教材とし，「命を見つめること」，「生きる力を育むこと」（菅，2018：204）をねらった国語科の実践も散見される（甲斐，2013；菅，2015；菅，2018）。そのため，デス・エデュケーションの課題として先に確認したような，「特別な授業」としての性格を強めないようにすることにも寄与できると考えられる。

以上のことから，子規の闘病記作品である『墨汁一滴』，『病牀六尺』，『仰臥漫録』の三作品を取り上げることとする[6]。このとき，前節で確認したように，死に向かう心理プロセスと，医療，看護に対する想いという二つの観点から，先行研究も踏まえながら，それぞれの作品から窺える内容を検討していく。

４．２．子規の闘病記に見る死に向かう心理プロセス

まず，子規の闘病記に表されている，死に向かう心理プロセスを確認する。

『墨汁一滴』は「日本」新聞に連載された随筆である。1901年１月から７月まで，つまり子規の死ぬ一年八ヶ月前から一年二ヶ月前まで書かれたものである。その内容には俳句や短歌などを話題にしたものも多いが，以下のように身体的な痛みや精神的な辛さ，自らの病の様子を記したものもある。

> 人の希望は初め漠然として大きく後漸く小さく確実になるならひなり。我病牀に於ける希望は初めより極めて小さく，遠く歩行き得ずともよし，庭の中だに歩行き得ば，といひしは四，五年前も事なり。その後一，二年を経て，歩行き得ずとも立つ事を得ば嬉からん，と思ひしだに余りに小さき望かなと人にも言ひて笑ひしが一昨年の夏よりは，立つ事は望まず座るばかりは病の神も許されたきものぞ，などかこつ程になりぬ。しかも希望の縮小は猶ここに止まらず。座ることはともあれせめては一時間なりとも苦痛無く安らかに臥し得ば如何に嬉からん，とはきのふ今日の我希望なり。小さき望かな。最早我望もこの上は小さくなり得ぬ程の極度に迄達したり。この次の時期は希望の零となる時期なり。希望の零となる時期，釈迦は之を涅槃といひ耶蘇は之を救ひといふらん。（一月三十一日）（正岡，1986：13）

> 毎朝繃帯の取替をするに多少の痛みを感ずるのが厭でならんから必ず新聞か雑誌か何かを読んで痛さを紛らかして居る。痛みが烈しい時は新聞を睨んで居るけれど何を読んで居るのか少しも分からないといふやうな事もあるが又新聞の方が面白い時はいつの間にか時間が経過して居る事もある。それで思ひ出したが昔関羽〔中国蜀の武将〕の絵を見たのに，関羽が片手に外科の手術を受けながら本を読んで居たので，手術も痛いであらうに平気で本を読んで居る処を見ると関羽は馬鹿に強い人だと小供心にひどくかんしんして居たのであった。ナアニ今考へて見ると関羽も矢張読書でもつて痛さをごまかして居たのに違ひない。（二月十三日）（正岡，1986：22）

散歩の楽，旅行の楽，能楽演劇を見る楽，寄席に行く楽，見せ物興行物を見る楽，展覧会を見る楽，花見月見雪見等に行く楽，細君を携へて湯治に行く楽，紅灯緑酒美人の膝を枕にする楽，目黒の茶屋に俳句会を催して栗飯の腹を鼓する楽，道灌山〔現在の荒川区西日暮里あたり〕に武蔵野の広きを眺めて崖端の茶店に柿をかじる楽。歩行の自由，坐臥の自由，寐返りの自由，足を伸す自由，人を訪ふ自由，集会に臨む自由，厠に行く自由，書籍を捜索する自由，癇癪の起りし時腹いせに外へ出て行く自由，ヤレ火事ヤレ地震といふ時に早速飛び出す自由。――総ての楽，総ての自由は尽く余の身より奪ひ去られて僅かに残る一つの楽と一つの自由，即ち飲食の楽と執筆の自由なり。しかも今や局部の疼痛劇しくして執筆の自由は殆ど奪はれ，腸胃漸く衰弱して飲食の楽亦その過半を奪はれぬ。アア何を楽に残る月日を送るべきか。

耶蘇信者某一日余の沈辺に来り説いて曰くこの世は短いです，次の世は永いです，あなたはキリストのおよみ返りを信ずる事によつて幸福でありますと。余は某の好意に対して深く感謝の意を表する者なれども，奈何せん余が現在の苦痛余り劇しくして未だ永遠の幸福を謀るに暇あらず。願くは神先づ余に一日の閒を与へて二十四時の間自由に身を動かしたらふく食を貪らしめよ。而して後に徐ろに永遠の幸福を考へ見んか。

●正誤 関羽外科の療治の際は読書にあらずして囲碁なりと。（三月十五日）（正岡，1986：56-57）

この頃は左の肺の内でブツブツブツブツといふ音が絶えず聞える。これは「佛佛佛佛」と不平を鳴らして居るのであらうか。或は「仏仏仏仏」と念仏を唱へて居るのであらうか。或は「物物物物」と唯物説でも主張して居るのであらうか。（四月七日）（正岡，1986：77）

をかしければ笑ふ。悲しければ泣く。併し痛の烈しい時には仕様がないから，うめくか，叫ぶか，泣くか又は黙つてこらへて居るかする。その中で黙つてこらへて居るのが一番苦しい。盛んにうめき，盛んに叫び，盛んに泣くと少しく痛が減ずる。（四月十九日）（正岡，1986：86）

痛くて痛くてたまらぬ時，十四，五年前に見た吾妻村あたりの植木屋の石竹畠を思ひ出して見た。（五月十七日）（正岡，1986：110）

ここに引用した文章からは，病気による直接的な辛さだけでなく，子規の死への考え方にも想いを馳せることができるだろう。また，それにユーモアを交えているのが特徴的である。たとえば一月三十一日の内容を見てみると，病気の進行により，子規が自分自身でできることが少なくなり，それに伴い自分が持つ希望も小さくなっていく様子が窺える。そして，次の段階にはその希望もなくなるであろうと推測している。これは，まさに子規の捉える，自らが死に向かう心理プロセスが描かれているものと言えよう。このことについて黒沢勉（1998）は，次のように評している。

> このような生の認識は，重い病気をかかえて死にゆく人の意見を見事に語ってもいる。あるいは老化から死に至るプロセスを圧縮した形で表現しているともいえよう。しかし，それはあまり語られることはない。老いゆく人も，死にゆく人も，その現実を直視することを恐れ，避けて語りたがらない。子規はそれを，平然とユーモアさえ交えて語った。（p. 143）

子規が表現したような内容は「あまり語られることはない」と黒沢が述べるように，自分の希望が小さくなっている現実は，人にとって自覚しがたいものに違いない。しかし，子規は読者を明確に想定できる「新聞」という媒体に連載している作品中にそれを表現したのである[7]。

『病牀六尺』も，『墨汁一滴』と同じく新聞「日本」に，1902年５月から死の二日前の９月17日の間という期間に連載されたものである。

> 病牀六尺，これが我世界である。しかもこの六尺の病牀が余には広過ぎるのである。僅に手を延ばして畳に触れる事はあるが，布団の外へ迄足を延ばして体をくつろぐ事も出来ない。甚だしい時は極端の苦痛に苦しめられて五分も一寸も体の動けないことがある。苦痛，煩悶，号泣，麻痺剤，僅に一条の活路を死路の内に求めて少しの安楽を貪る果敢なさ，それでも生きて居ればいひたい事はいひたいもので，毎日見るものは新聞雑誌に限って居れど，それさへ読めないで苦しんで居る時も多いが，読めば腹の立つ事，癪にさはる事，たまには何となく嬉しくて為に病苦を忘るる様な事が無いでもない。年が年中，しかも六年の間世間も知らずに寐て居た病人の感じは先づこんなものですと前置きして（正岡，1986：153）

『病牀六尺』は上記のように，毎日のすべてが苦しさに覆われているわけではないとする前置きの後に，俳句，

短歌論のほかに，病の様子やその辛さ，そこから巡らせた想いなどが記されている。たとえば以下のようなものである。

> 病牀に寝て，身動きの出来る間は，敢て病気を辛しとも思はず，平気で寝転んで居つたが，この頃のやうに，身動きが出来なくなつては，精神の煩悶を起して，殆んど毎日気違のやうな苦しみをする。この苦しみを受けまいと思ふて，色々に工夫して，或は動かぬ体を無理に動かして見る。愈々煩悶する。頭がムシヤムシヤとなる。もはやたまらんので，こらへにこらへた袋の緒は切れて，遂に破裂する。もうかうなると駄目である，絶叫。号泣。益々絶叫する，益々号泣する。その苦その痛何とも形容することは出来ない。寧ろ真の狂人となつて仕舞へば楽であらうと思ふけれどそれも出来ぬ。若し死ぬることが出来ればそれは何よりも望むところである，併し死ぬることも出来ねば殺して呉れるものもない。一日の苦しみは夜に入つてやうやう減じ僅に眠気さした時にはその日の苦痛が終ると共にはや翌朝寝起の苦痛が思ひやられる。寝起程苦しい時はないのである。誰かこの苦を助けて呉れるものはあるまいか，誰かこの苦を助けて呉れるものはあるまいか。（六月二十日）（正岡，1986：208）

このように，『病牀六尺』にも病に苦しみ，死んだ方がましだとする子規の姿を窺える文章が見られるのであるが，なかでも注目すべきものが以下である。

> 或人からあきらめるといふことに就て質問が来た。死生の問題などはあきらめて仕舞へばそれでよいといふた事と，又嘗て兆民居士を評して，あきらめる事を知つて居るが，あきらめるより以上のことを知らぬと言つたことと撞着〔矛盾〕して居るやうだが，どういふものかといふ質問である。それは比喩を以て説明するならば，ここに一人の子供がある。その子供に養ひの為めに，親が灸を据ゑてやるといふ。その場合に当つて子供は灸を据ゑるのはいやぢやといふので，泣いたり逃げたりするのは，あきらめのつかんのである。若し又たその子供が到底逃げるにも逃げられぬ場合だと思ふて，親の命ずる儘におとなしく灸を据ゑて貰ふ。これは已にあきらめたのである。併しながら，その子供が灸の痛さに堪へかねて灸を据ゑる間は絶えず精神の上に苦悶を感ずるならば，それは僅にあきらめたのみであつて，あきらめるより以上の事は出来んのである。若し又たその子供が親の命ずる儘におとなしく灸を据ゑさせる計りでなく，灸を据ゑる間も何か書物でも見るとか自分でいたづら書きでもして居るとか，さういふ事をやつて居つて，灸の方を少しも苦にしないといふのは，あきらめるより以上の事をやつて居るのである。兆民居士が一年有半を著した所などは死生の問題に就てはあきらめがついて居つたやうに見えるが，あきらめがついた上で夫の天命を楽んでといふやうな楽むといふ域には至らなかったかと思ふ。居士が病気になつて後頻りに義太夫を聞いて，義太夫語りの評をして居る処などは稍々わかりかけたやうであるが，まだ十分にわからぬ処がある。居士をして二，三年も病気の境涯にあらしめたならば今少しは楽しみの境涯にはひる事が出来たかも知らぬ。病気の境涯に処しては，病気を楽むといふことにならなければ生きて居ても何の面白味もない。（七月二十六日）（正岡，1986：257-258）

この「病気を楽む」という子規のことばは重要である。子規の闘病と同時期に書かれた闘病記として，がんで一年半の余命宣告をされていた中江兆民の『一年有半』がある。この作品の内実は，政治や社会への攻撃的な怒りがほとんどであるが，なかには身の周りのこと，死に関することなどを述べたものもある。この作品は世間に大いに受け入れられたものの，子規はそれを批判したのである。子規は，論評「命のあまり」で，「平凡淺薄」（正岡，1975：535）と『一年有半』を酷評している。それは，年齢や知識などでは兆民の方が子規よりも先輩ではあるのだが，「病氣の上に於ては予の方が慥に先輩である」（正岡，1975：535）から「「一年有半」を罵倒する資格（チト變な資格だが）があるものを尋ねたら恐らくは予一人位であらう。」（正岡，1975：535）という考えに基づく。同じ論評のなかで子規は，次のように述べる。

> 「一年有半」のうちに大阪の義太夫を表したところがいくらもある。これはさすがに兆民居士が他の俗人の仲間より頭をぬき出して居るところであるが，併し義太夫以上のたのしみを解せんところは矢張根本に於て俗人たるを免れん。居士は學問があるだけに理窟の上から死に對してあきらめをつけることが出來た。今少し生きて居られるなら「あきらめ」以上の域に達せられることが出來るであらう。（正岡，1975：536）

この他にも，子規の兆民への評は見られる。以下は『仰臥漫録』の内容である。

> 兆民居士の一年有半といふ書物世に出候よし新聞の評にて材料も大方分り候 居士は咽喉に穴一ツあき候由吾等は腹背中臀ともいはず蜂の巣の如く穴あ

き申候 一年有半の期限も大概は似より候ことと存候 乍併居士はまだ美といふ事少しも分らずそれだけ吾等に劣り可申候 理が分ればあきらめつき可申 美が分れば楽み出来可申候 杏を買ふて来て細君と共に食ふは楽みに相違なけれともどこかに一点の理がひそみ居候 焼くが如き昼の暑さ去りて夕顔の花の白きに夕風そよぐ処何の理窟か候べき（十月十五日）（正岡，1986：407）

これらのことをまとめると子規は，兆民を「理」は分かるが「美」が分からぬ人であり，だからあきらめをつけることはできているものの，それを超越した「楽しむ」ということができていないというのである。

この考え方について工藤真由美（1996）は，「本当の意味での自然の妙としてのありのまま」（p.288）という子規の写生観との関連性を指摘している[8]。さらに子規は，あきらめることと楽しむことの関係を子どもが灸を据えることを具体例にしながら説明している。**図1**に，稿者によって整理した，子規の「あきらめ」と「楽しみ」の捉え方を示す。

事であるので，一旦あきらめて仕舞へば直に解決されて仕舞ふ。（七月十六日）（正岡，1986：242）

ここで子規の述べたかったことは，「あきらめ」の先の段階に進むこと，すなわち，楽しむことは，「（兆民＝稿者補）居士をして二，三年も病気の境涯にあらしめたならば今少しは楽しみの境涯にはひる事が出来たかも知らぬ。」との文言からも推し量れるように，時間をかければたどり着く境地だということであろう。子規はその「二，三年」を「直に」と表現した。このように，子規は病気を楽しむといった境地にまで達していたのである。

翻って，これはデーケンが勧める「ユーモア教育」という考え方に近いものであるといえる。

「生と死の教育」の場というと，笑い声ひとつ立てられない厳粛な雰囲気だろうと思う人がいたら，とんでもない誤解である。私たちは，死のその瞬間までは生きているのだから，もっとほほえんで，毎日を楽しく生きるべきではないだろうか。（デーケン，2001：49）

段階 ⟶	「あきらめ」 ⟶	「楽しみ」 ⟶
灸	・逃げられないと、灸を据えて貰う。 ・灸の痛みに苦悶する。	・灸は据えているが、書物やいたずら書きをすることで灸を苦にしない。
病気	・治ることはない考える。 ・病気の痛みに苦しむ。	・病気ではあるが、付き合いながら苦にせず義太夫鑑賞や物書きなどをする。

図1　子規の「あきらめ」と「楽しみ」の捉え方

この図のような段階を，子規は自らの死へと向かう心理プロセスとして捉えていたのである。先に引用した『墨汁一滴』の三月十五日の内容にあるように，子規の楽しみはどんどん病に奪われていった。しかし子規は，先に引用した『病牀六尺』の前置きにあるように，新聞雑誌のなかから楽しみを見出したり，『墨汁一滴』にあるように，毎日の生活のなかで楽しみを見出したりする。

ガラス玉に金魚を十ばかり入れて机の上に置いてある。余は痛をこらへながら病床からつくづくと見て居る。痛い事も痛いが綺麗な事も綺麗ぢや。（四月十五日）（正岡，1986：83）

これまで示した子規の考え方を踏まえると，このような「美」に気づけるようになると，病気をも楽しむことができるということにある。また先に引用した七月二十六日の内容は，以下の質問に答えるというものであった。

死生の問題は大問題ではあるが，それは極単純な

デーケンが病気や死に対しネガティブな感情を持たないようにし，できるだけ笑う，楽しむことを重視する「ユーモア教育」を目指したように，子規も「楽しく」今を生きようとしたのである[9]。

ところで，先に黒沢（1998）の論として，「長い病床生活の，このような心境の変化は大局的にみれば，キューブラー・ロスがいうような死を告知された時の「怒り」から「受容」へと変化する心境に対応する」（p.245）との指摘を取り上げた。しかしキューブラー・ロス（2001）は「受容を幸福な段階と誤認してはならない。受容とは感情がほとんど欠落した状態である。」（p.193）としている。すなわち，「あきらめ」という語で表現できる段階といえる。これを踏まえると，「楽しく」今を生きようとした子規があったのはこの段階ではない。さらに，子規の死への態度はデーケンの述べる第6段階「期待と希望」のようなものでもない。なぜなら子規は，死後の生命への希望を持っていたわけではなく，今ここに「正岡子規」という人間として在る生命をどこまで豊かなものにしていくか，また，どれだけ野心を満たしていくことがきる

のかということにこだわっていた。「病気を楽む」という子規のことばには，病気と付き合う状況の中でなにか作品を創り上げていこうとする気概を感じることができる。つまりこのような段階こそが，キリスト教的とはいえない「受容」の先の段階の姿の一つなのである。

4．3．子規の闘病記が示す医療・看護のあり方への要求

また，『病牀六尺』には，先に門林が闘病記の価値として挙げた「医療のあり方への著者からの提言」を見ることができる。以下は，子規が看護について述べたものである。

> 直接に病人の苦楽に関係する問題は仮定の問題である，介抱の問題である。病気が苦しくなつた時，又は衰弱の為めに心細くなつた時などは，看護の如何が病人の苦楽に大関係を及ぼすのである。殊に唯だ物淋しく心細きやうの時には，傍の者が上手に看護して呉れさへすれば，即ち病人の気を迎へて巧みに慰めて呉れさへすれば，病苦などは殆ど忘れて仕舞ふのである。然るにその看護の任に当る者，即ち家族の女共が看護が下手であるといふと，病人は腹立てたり，癇癪を起したり，大声で怒鳴りつけたりせねばならぬやうになるので，普通の病苦の上に，更に余計な苦痛を添へるわけになる。（中略＝稿者）家族の者が病人の側に坐つて居て呉れても種々な工夫して病人を慰める事がなければ，病人は矢張無聊に堪へぬ。けれども家族の者に夫だけの工夫がない。そこでどうしたらばよからうといふ問題が又起つてくる。（七月十六日）（正岡，1986：243）

この部分の後に，女子の教育が必要であり，教育を受けてきた女子ならば自分の満足のいく看病をすることができるはずであるとの論が続く。子規は，母や，妹の律による手厚い看病を受けていたにも関わらず，その看病が良くないという厳しい要求を向けたのである。ただし，律個人の否定をしているのではない。子規は，『仰臥漫録』で以下のように述べている。

> 律ハ強情也　人間ニ向ツテ冷淡也　特ニ男ニ向ツテ shy 也　彼ハ到底配偶者トシテ世ニ立ツ能ハザルナリ　シカモソノ事ガ原因トナリテ彼ハ終ニ兄ノ看病人トナリ了レリ　若シ余ガ病後彼ナカリセバ余ハ今頃如何ニシテアルベキカ　看護婦ヲ長ク雇フガ如キハ我能ク為ス所ニ非ズ　ヨシ雇ヒ得タリトモ律に（ママ）勝ル所ノ看護婦即チ律ガ為スダケノ事ヲ為シ得ル看護婦アルベキニ非ズ　律ハ看護婦デアルト同時ニオ三ドンナリ　オ三ドンデアルト同時ニ一家ノ整理役ナリ　一家ノ整理役デアルト同時ニ余ノ秘書ナリ　書籍ノ出納原稿ノ浄書モ不完全ナガラ為シ居ルナリ　而シテ彼ハ看護婦ガ請求スルダケノ看護料ノ十分ノ一ダモ費サザル也野菜ニテモ香ノ物ニテモ何ニテモ一品アラバ彼ノ食事ハ了ル也　肉ヤ肴ヲ買フテ自己ノ食料トナサンナドトハ夢ニモ思ハザルガ如シ　若シ一日ニテモ彼ナクバ一家ノ車ハソノ運転ヲトメルト同時ニ余ハ殆ド生キテ居ラレザル也故ニ余ハ自分ノ病気ガ如何ヤウニ募ルトモ厭ハズ只彼ニ病無キコトヲ祈レリ　彼在リ余ノ病ハ如何トモスベシ　若シ彼病マンカ彼モ余モ一家モニツチモサツチモ行カヌコトトナル也　故ニ余ハ常ニ彼ニ病アランヨリハ余ニ死アランコトヲ望メリ　彼ガ再ビ嫁シテ再ビ戻リソノ配偶者トシテ世ニ立ツコト能ハザルヲ証明セシハ暗ニ兄ノ看病人トナルベキ運命ヲ持チシ為ニヤアラン　禍福錯綜人智ノ予知スベキニアラズ（九月二十一日）（正岡，1986：364-365）

黒沢（1998）は，この部分について，「あまりにむごい非情な言い方」(p.222) であり，「むきだしの憎悪」(p.222) であり，「手厳しい律批判」(p.223) であるとする。しかしここからは，律への深い愛情，そして感謝のみを読み取ることができるのではないだろうか。「若シ余ガ病後彼ナカリセバ余ハ今頃如何ニシテアルベキカ」と仮定する子規の想像は，律の存在の大きさを噛みしめていることと読み取れるからである[10]。たとえば，律は二度の結婚と離婚をしているが，二度目の離婚は，子規の看病のためであったとも言われている。それを子規が知らないはずがないだろう。子規はさらに同じ日に律のことを記している。

> 彼ハ癇癪持ナリ　強情ナリ　気ガ利カヌナリ　人ニ物問フコトガ嫌ヒナリ　指サキノ仕事ハ極メテ不器用ナリ　一度キマツタ事ヲ改良スルコトガ出来ヌナリ　彼ノ欠点ハ枚挙ニ遑アラズ　余ハ時トシテ彼ヲ殺サント思フ程ニ腹立ツコトアリ　サレドソノ実彼ガ精神的不具者デアルダケ一層彼ヲ可愛ク思フ情ニ堪ヘズ　他日若シ彼ガ独リデ世ニ立タネバナラヌトキニ彼ノ欠点ガ如何ニ彼ヲ苦ムルカヲ思フタメニ余ハ成ルベク彼ノ癇癪性ヲ改メサセント常ニ心ガケツツアリ　彼ハ余ヲ失ヒシトキニ果シテ　余ノ訓戒ヲ思ヒ出スヤ否ヤ
>
> 病勢ハゲシク苦痛ツノルニ従ヒ我思フ通リニナラヌタメ絶エズ癇癪を起シ人ヲ叱ス　家人恐レテ近ヅカズ　一人トシテ看病ノ真意ヲ解スル者ナシ
>
> 陸奥福堂高橋自恃ノ如キモ病勢ツノリテ後ハ屢妻君ヲ叱リツケタリト（九月二十一日）（正岡，1986：365-366）

ここからも，子規の律への愛情を見出すことができよう。律に不足しているところは多くあるとしているものの，律のことが可愛く，自分が死んだ後の律を心配している。最後の二つの段落は，内心は家族のことを愛しているにも関わらず，病による苦痛のせいで癇癪を起こしてしまうという子規のフラストレーションの表れ，そしてそれを表してしまうことへの弁解なのであろう。結果として，病人を看病する立場の人間には精神的なサポートが必要であるということを訴えるものとなっているといえる[11]。

４．４．その他の価値

ところで『仰臥漫録』は，『墨汁一滴』や『病牀六尺』とは異なる性格を有している。それは，新聞「日本」に連載されたものではなく，公表する意図のない私的な記録であるという点である。文学者としてではなく，一個人としての本心がこの『仰臥漫録』にはあると捉えられる。つまり，先に引用した『仰臥漫録』における律についての記述は本心ということになる。また以下の部分は，そのような私的な文章であるからこそ書き得たものといえる。

> 吾等なくなり候とも葬式の広告など無用に候　家も町も狭き故二，三十人もつめかけ候はば柩の動きもとれまじく候
> 何派の葬式をなすとも柩の前にて弔辞伝記の類読み上候事無用に候
> 戒名といふもの用ゐ候事無用に候　曾て古人の年表など作り候時狭き紙面にいろいろ書き並べ候にあたり戒名といふもの長たらしくて書込に困り申候戒名などは無くもがなと存候　自然石の石碑はいやな事に候
> 柩の前にて通夜すること無用に候　通夜するとも代りあひて可致候
> 柩の前にて空涙は無用に候　談笑平生の如くあるべく候（十月十五日）（正岡，1986：407）

自らが死んだ後に行う葬式のことなどが述べられているこの部分は，遺書と捉えられよう。私的な記録である『仰臥漫録』にあって，「候」という丁寧語が使われるような相手意識のある文章は珍しい。黒沢はこの遺書について，以下のように述べている。

> 死体になった自分の体を取り囲み，嘆き悲しみ，大騒ぎしている様子を空想してみれば，「談笑平生の如くあるべし」とゆとりをもってさとしたくもなろう。こんな遺書を書いた子規は，もはやこの世の人ではなく，あの世の人であった。
> この遺書は死に慣れ親しみ，それこそ幾度も考え続け，時にそれをバネとして生きた子規でなければ書けぬものであろう。死を忘れたり，死をいたずらに恐れがちな私達にとって，反復熟読すべき悟達の境地に近い遺書といってよい。（pp.241-242）

このような遺書に学習者が触れることは，デス･エデュケーションの観点から考えると，有意なことである。たとえば，Gordon & Klass（1979）は，デス・エデュケーションのカリキュラムを構想した際，12年生段階で，「生命保険と遺言について生徒に熟知させる」（p.207）という目標を設定している。もちろん『仰臥漫録』は遺書だけでなく，病苦について，日記として述べた内容も含まれているものの，遺書としての性格を持つという点においても，死に直面している子規に読者が近づけ，かつデス・エデュケーションの他の観点をカバーできるものといえるのである。

５．結語

これまで確認したように，子規の闘病記を考察することで，「死へのプロセス」の最終段階として，我が国に親和性のある具体的な一つの姿や，看護や医療のあり方に対する要望の具体も読み取ることができる。つまり，このような面のある闘病記を読むことが，デス･エデュケーションの目標達成に資する活動であることを示している。国語科教育においてデス・エデュケーションを目指す場合，キューブラー・ロス，あるいはデーケンが示した，死へ向かうプロセスの各段階に位置している闘病記を集めて編成し，単元とすることで，「１．死へのプロセスの理解」という目標は達成されることとなると考えられる。

また，子規の死生観を探るならば，漱石との往復書簡や俳句，短歌などにも視野を広げることも考えられる。たとえば，2009年に見つかった選歌集「なじみ集」には，子規のいとこで非常に仲の良かったとされる藤野古白の歌が選ばれていない。その古白のピストル自殺は，子規の死生観に大いに影響を与えた[12]事象であったことが指摘されている（工藤，1996）ことを踏まえると，その意味を考えることも，デス・エデュケーションの可能性として示唆される。さらには，工藤真由美（2018）が子規の陸羯南に対する恩を整理した際に取り上げている，子規が自身で書いた自分の「墓碑銘」についても，活動の材料としての活用可能性がある[13]。これらのように，とりわけ子規による闘病記には，デス・エデュケーションの観点からさまざまな可能性を見ることができるのである。それらを用いた具体的な実践の構想は，今後の課題としたい。

注

[1] キューブラー・ロス（2001）では，第１段階でとどまり続けた患者の例が示されている（pp.68-85）。

[2] この到達目標は，「生徒の大切な他者の死についての考えを感情的に処理することを手助けすること。」（Gordon & Klass，1979：129）という大目標の下位に位置づけられている。

[3] この理由を門林道子（2002）は，自らが行った専門学校での調査結果で，若い生徒は本人によるのもののみ闘病記と認めているが，年齢が高くなり，身内の病気や死を経験していくほど，家族が書いたものも闘病記であるとみなす結果を得たためとしている。

[4] 門林道子（2005）は，闘病記の社会的意味を，以下のようにまとめている。

①同じような病い（ママ）や障害をもつ当事者同士，類似体験をもつもの同士が支えあうピア・カウンセリング的な役割を果たす②テキストとして患者や家族のみならず多くの人々へ多様な死生観や病い（ママ）観，治療法などのさまざまな情報提供や指針を与える参考書的役割を担う③医療の枠組みや当時の価値観の変遷を歴史的に映し出すことなど（p.98）

これらを念頭に門林が実際に看護学生に行った授業では，「単にかわいそう，気の毒なものだと考えていた闘病記が，実は患者が死と直面しながらも残された生を一所懸命に生きようとする，その過程が伝わってくる力強いものだと知った」（p.98）との感想が学生から示されたとしている。

[5] 工藤真由美（1996）では，結核がロマン主義的なものとして美化することや，死を意識させながらも時間的には緩やかな経過をたどることなどから，芸術との親和性があるとしている（pp.122-123）。病気になった子規は，できることが限られていた。そこで〔選んだ／選ばざるを得なかった〕ものが文学の道である。

[6] 本稿では，依拠テクストとして，『子規三大随筆』（講談社学術文庫，1986年）を使用する。

[7] 『墨汁一滴』における子規の死生観の特徴について沼田真里（2020）は，「〈死後〉〈死後の自分のありよう〉が既に範疇にあった点」（p.64），「客観的視点，観察者としての視点を取り入れることで，自己の〈死〉を〈主観／客観〉の両方面から観察していた点」（p.64）を挙げている。

[8] なお，子規のこの境地について井上泰至（2020）は，『易経』の一節や，それを紹介した儒学者である貝原益軒の影響があったと指摘している（p.178）。

[9] 工藤真由美（1996）は，「死を視野に収めつつ生きていくという実存への目覚めと，死を視野に収めつつも，自暴自棄にならない，発展的な思考形態」（p.185）と表している。

[10] 子規の律に対する想いについては，風間勢津子（1987）でも，「律に関する記事や文献はあまりに少な」（p.43）いこともあり，「子規の文章によって描かれたその姿は一見，強情で理窟づめで冷淡で木石のような女という，およそ最低のものであった。しかし，その前後を読むことにより私はその奥深く隠れてなかなか招待を現わさなかった律の女らしさや，やさしさに触れることができた。」（p.43）とされている。

[11] 野崎衣枝（1990）では，この子規の事例から，「社会が全体として家族の負担を軽減するシステム」（p.64）の必要性を訴えている。

[12] たとえば，『仰臥漫録』の十月十三日に書かれた部分に，「古白曰来」という文言がある。つまり子規は，死んであの世にいる古白が，こちらに来いと言うのを感じたのである。この日の子規の家では，妹も母も用事で家を空けていた。その際に子規は，古白と同じく自殺への誘惑に駆られていたのである。このことからも，子規の死生観において，古白の存在は重要な位置を占めていることが窺える。

[13] 「墓碑銘」を日本の実践に持ち込む例は少ないと考えられるが，アメリカにおいて Gordon & Klass（1979）が構想したカリキュラムでは，６，７年生の段階において，「成熟した生徒は，自身や他者の予期される死への感情や，死ぬときにもつことになるであろう感情がわかる。」（p.177）という目標のもと，「誰かの墓碑銘を書いてみる。」（p.177）という活動が設定されている。

参考引用文献

青柳路子（2005）「E.キューブラー=ロスの思想とその批判―シャバンによる批判を手がかりに―（上）」『死生学研究』第６号，pp.259-277

青柳路子（2006）「E.キューブラー=ロスの思想とその批判―シャバンによる批判を手がかりに―（下）」『死生学研究』第７号，pp.371-399

赤澤正人（2004）「デス・エデュケーションの学校現場における展開」『生老病死の行動科学』第９号，pp.75-82

赤澤正人（2005）「学校現場におけるデス・エデュケーションの実践内容」『生老病死の行動科学』第10号，pp.35-46

阿武泉（1998）「死の在り方から探る単元の授業「『生きる』～いのちのおわりまで」の試み」『横浜国大国語教育研究』第９号，pp.16-23

池田匡史（2014）「国語科教育とデス・エデュケーションとの距離―「死」をめぐる主題単元学習を主な手がかりとして―」『論叢国語教育学』第10号，pp.36-48

井上泰至（2020）『正岡子規―俳句あり則ち日本文学あり―』ミネルヴァ書房

井上泰（2011）「学習者の「読みの構え」を育成する国語

科授業―〈死〉について考える―」『広島大学附属福山中・高等学校 中等教育研究紀要』第51号，pp.195-200
岩田文昭（2009）「教員養成の観点から見たいのちの教育」『現代のエスプリ』499号，pp.166-173
大曲美佐子・長井ゆかり（2008）『死に関する準備教育―自分と家族について考える学習プログラム―』家政教育社
甲斐伊織（2013）「実践報告：単元「人間・正岡子規」―情報読書への入り口として―」『学習院高等科紀要』第11号，pp.91-108
風間勢津子（1987）「「子規俳句」に見られる律の姿」『たまゆら』第19号，pp.33-44
門林道子（2001）「闘病記をめぐるコミュニティの形成」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第7号，pp.145-161
門林道子（2002）「病いの語り―グリーフワークとしての闘病記―」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第8号，pp.123-137
門林道子（2004）「闘病記に学ぶ生と死」『ターミナルケア』14巻３号，pp.207-210
門林道子（2005）「闘病記とデス・エデュケーション―看護教育等における実践―」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第11号，pp.87-100
菅俊輔（2015）「正岡子規と「病牀六尺」―言葉の力を実感し，「命と向き合い，命のあり方を問う」ための教材開発と授業実践」『東京学芸大学附属小金井中学校研究紀要』第51号，pp.149-180
菅俊輔（2018）「言葉を通して命を見つめ生きる力を育む授業作り―正岡子規と秋山真之の「言葉」の往還を中心として」『東京学芸大学附属小金井中学校研究紀要』第54号，pp.203-274
キューブラー・ロス，E.，鈴木晶訳（2001）『死ぬ瞬間 死とその過程について』中公文庫
工藤真由美（1996）『正岡子規の教育人間学的研究』風間書房
工藤真由美（2018）「恩と人間形成―正岡子規と陸羯南の考察―」『四條畷学園短期大学紀要』第51巻，pp.34-38
黒沢勉（1998）『病者の文学―正岡子規』信山社
小池孝範（2010）「教育において「死」を扱う意義―「デス・エデュケーション」再考―」『秋田県立大学総合科学部研究彙報』第11号，pp.17-27
竹松志乃（2012）「米英で出版されたデス・エデュケーションのテキスト―テキスト分析を通して見た日本のデス・エデュケーションに関する一考察―」『明治大学人文科学研究所紀要』第70冊，pp.180-191
竹本正子（2011）「中学生と古典との出会いをめぐる一提案―「死」との出会いを意識した授業開発の実践―」『国語教育研究』第52号，pp.13-21
土出郁子（2008）「「闘病記」資料群の性格と愛媛大学図書館医学部分館における事例」『大学図書館問題研究会誌』第31号，pp.7-15
デーケン，アルフォンス（1986）「死への準備教育の意義」アルフォンス・デーケン，メヂカルフレンド社編集部編『死を教える』メヂカルフレンド社，pp.1-63
デーケン，アルフォンス（2001）『生と死の教育』岩波書店
得丸定子・北原利枝・石塚智子・田宮仁（1999）「「生と死の教育」のための教材開発―小学校高学年向け教材」『日本家政学会誌』50巻11号，pp.71-78
沼田真里（2020）「正岡子規の時間意識―〈美〉と死生観の構造」『新居浜工業専門学校紀要』第56号，pp.59-68
野崎衣枝（1990）「明治文学に現れた死をみとる家―正岡子規の場合を中心に―」『順天堂医療短期大学紀要』第１号，pp.64-73
初田隆（2017）「「デス・エデュケーション」としての美術教育研究序説」原田智仁・關宏和・二井正浩編著『教科教育学研究の可能性を求めて』風間書房，pp.115-124
藤尾均（2011）「闘病文学を素材とする哲学・史学・文学統合教育の実践」『薬学図書館』56巻3号，pp.258-261
正岡子規（1975）『子規全集十二巻』講談社
正岡子規（1986）『子規三大随筆』講談社学術文庫
山本伸子（1998）「単元「生と死をみつめて」について―夏目漱石『こころ』をどう扱うか―」『国語教育研究』第41号，pp.133-147
若杉かおる（1998）「生と死を考える古典の授業―自己を見つめさせる「心の教育」のための試案―」『Groupe Bricolage 紀要』No.16，pp.2-29
Gordon, A. & Klass, D. (1979) *They Need to Know:How to Teach Children about Death.,* A Spectrum Book.

【附記】
本研究は JSPS 科研費 JP19K14201 の助成を受けている。